

2024年9月8日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教9「妥協しない愛」

詩編69：8～13、ヨハネ2：13～22

すべての福音書に「宮きよめ」の話がありますが、ヨハネ福音書は他の福音書とはまた違う視点でこの出来事を伝えています。18節以下はヨハネ福音書に特有の部分ですが、「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる」（19節）この言葉が、イエスさまの十字架の死とよみがえりを示していることは明らかです。そのようにヨハネの教会は、宮きよめの出来事をイエスさまの十字架とよみがえりと結びつけています。

カルヴァンは、注解書の中で次のように書いています。「キリストは二度神殿から、いまわしい冒瀆的な商品を取りはらったことになる。一度目は、かれの使命を実行しはじめた最初の頃、二度目は、この世を去って父のところに行く時が近づいた頃である」イエスさまは、二度宮きよめをなさったと言う。初めは宮きよめ、終わりは十字架とよみがえりである、と。さらに「この時かれがおこなったことは、父からつかわされた目的である改革の、いわば準備だったのだ」とも書いています。この宮きよめは、イエスさまの活動の目的、十字架とよみがえりの準備として行われた。そのようにして福音書の初めと終わりを結んでいる。このように初めと終わりを結ぶというのは、聖書が好んで用いる一つの技法として、インクルージオ（囲い込み構造）と聖書学的には申します。ここに福音書の目的、伝えたい信仰がある。それこそがイエスさまの十字架とよみがえりの御業なのです。

さらに「過越祭」（13節）とあります。この過越祭ですぐに思い出されますのは、洗礼者ヨハネがイエスさまを見て「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」（1：29、36）と言ったことです。この「神の小羊」という表現は、何より過越の祭で屠られる犠牲の小羊を見ている。イエスさまが過越祭でエルサレムに上ったということは、ご自身を過越の犠牲の小羊として十字架でお献げになられるということに他なりません。そのことが宮きよめの出来事の根底にあります。そこで贖われ、清められるべき人間の罪とは何でしょうか。

エルサレムの神殿では、特に異邦人の庭と呼ばれる一角では、商人が商いをしていました。それは違法ではなく、合法的に行われていたのです。エルサレムの神殿は、特に過越祭には巡礼に訪れるユダヤ人で賑わいました。離散のユダヤ人が各地に点在していましたが、この時はエルサレムに帰ってくるのです。それは神の民としてのアイデンティティを確かめる重要な時だったのでしょう。ルカ福音書には、12歳のイエスさまが過越歳の時にエルサレムに巡礼した話が出てきます（2：41～）。

巡礼者は、律法で定められた献げ物を神殿で献げなければなりません。しかし牛や羊を連れて何日も旅をするのは大変です。ですから神殿に牛や羊が売っていることは、巡礼者たちにとって非常に便利でした。要するに現地調達ができるということです。また両替とありますのは、神殿に献げる貨幣はユダヤの貨幣と決まっていた。巡礼者の多くは外国に住んでいますからローマやギリシャの貨幣しか持っていない。それをユダヤの貨幣に両替する必要があります。そこに商売が成り立つのです。求める者がいて、提供する者がいる。需要と供給が成り立っているのです。

わたくしは、千葉県成田の出身なのですが、成田には成田山という大きなお寺がありまして、そこは多くの参拝客で賑わいます。高校生の時、正月に友だちを案内したことがありましたが、本当に芋を洗うような混みようで驚きました。成田山の門前町にはうなぎ屋さんなどお店がたくさん並んでいます。そこでは信仰と商売がつながるのです。信仰を利用した商売と言ってもよいかもしれません。信仰を利用して、利を貪る話はいくらでもあります。そういう宗教が問題になったりするでしょう。でもわたしたちはそれを対岸の火事のように眺めていてよいのでしょうか。

結婚式の問題をいつも考えます。世の中では結婚式と言えばチャペルウェディングが主流ですが、それこそ信仰を利用した商売以外の何ものでもありません。教会より立派な礼拝堂、ステンドグラスやパイプオルガン、聖歌隊を揃え、外国人を牧師に見立てて司式をさせる。ある教会の話、その教会は結婚式場として礼拝堂を貸し出したり、結婚の写真撮影の場所に提供して収入を得ています。でも他人事ではありません。私どもの教会でもよく駐車場を貸してくださいという依頼があります。それは教会にとって大きな誘惑です。教会としては決まった収入があるからいいじゃないか。需要と供給が成り立つのだからいいではないか。でも神さま抜きで、自分たちの利益のためにすることが神さまに喜ばれることでしょうか。それは神さまを利用しているということではないでしょうか。十戒の第三戒「主の名をみだりに唱えてはならない」神さまの名を持ち出して、自分に都合よく利用する。そういう利己主義という誘惑とわたしたちは闘わなくてははいけないのです。

相手を利用する、取引きする、それは愛することとは無縁です。今日の箇所は、激しいイエスさまの一面が垣間見えますが、ここでイエスさまは愛のために闘っておられます。「わたしの父の家を商売の家としてはならない」（16節）誰かを利用したり、取引きするのではなく、計算するのでもなく、誰かのために惜しまず何かをしたり、喜んで仕えることができる、この愛を取り戻すためにイエスさまが本気で闘っておられる。そして最後はこの愛を取り戻すためにイエスさまは十字架で死んでよみがえってくださいました。そこには取引も、計算もありません。惜しまずその命を献げられた。愛の限りを尽くされたのです。

ヨハネ福音書は、この愛を伝えることを目的にしているのではないのでしょうか。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（3：16）何よりイエスさまの公生涯の初めが結婚式の話です。愛するとはどういうことなのか。夫婦の愛、親子の愛、そこでわたしたちはどういう愛の形を求めているのでしょうか。お互いが利益になることを考えて結婚するのでしょうか。見返りを計算して子育てするのでしょうか。それならば商売の相手としてみているということです。イエスさまはご自身の命を持ってわたしたちを愛してくださいました。わたしたちの神さまを愛する愛、人を愛する愛が問われています。

天の父よ。まるで商売でもするようにあなたに向かい、人に向かう心があります。でもそのようなわたしたちのためにイエスさまは本気で愛を取り戻すために本気で闘ってくださいました。最後はご自身を惜しまず十字架で献げてくださいました。このイエスさまの愛に応じて生きる者とさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。